まっちゅうへ ようこそ

公立松任石川中央病院

presented by 白山石川医療企業団 ②

公立松任石川中央病院は、白山、野々市、川北の3市町で暮らす人々の健康な生活を支えています。「まっちゅう」が推進する「患者ファースト」の取り組みを紹介します。

患者 医師 薬剤師

「三方よし」の電子処方箋スタート

公立松任石川中央病院は8月、紙の処方箋を電子化し、医師と薬剤師がオンラインでやり取りする

「電子処方箋」のシステム運用を始めました。患者さんに安全、かつ適切にお薬を処方することはもちろん、医師、薬剤師の利便性も向上する「三方よし」のシステムで、さらなる「病薬連携」を進めます。

重複投薬、飲み合わせ確認

国が全国での導入を目指す電子処方箋は、患者さんの処方履歴が専用サーバーで一元管理されるため、複数の医療機関から同じ薬が処方される「重複投薬」を避けたり、飲み合わせの悪い薬の処方を防止したりすることができます。

病院を運営する白山石川医療企業団の横山邦彦副企業長（同病院PETセンター長）によると、「重複投薬や余らせて廃棄される薬は、国内で年間1兆円分あると言われている」そうで、電子処方箋は医療費の無駄を抑制する役割も期待されています。

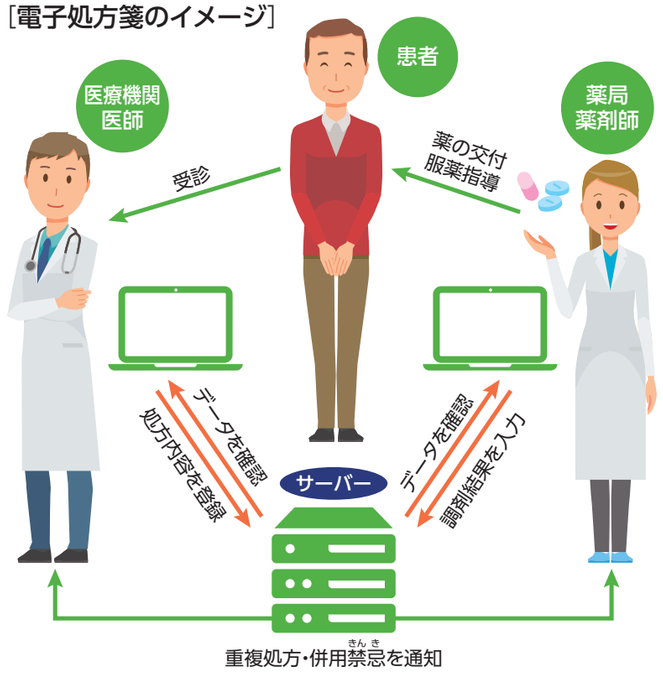
地域の医療DX推進

「まっちゅう」では、横山副企業長を旗振り役に、デジタル技術を活用した「医療DX」を、地域の関係機関と連携しながら推進してきました。

6月に開催した地域医療連携機関交流会（北國新聞社後援）には、

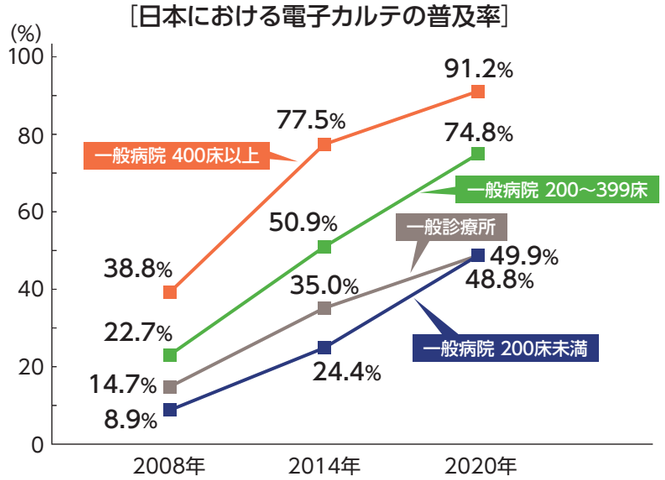
約160人が参加した交流会では、横山副企業長が講演しました＝6月、白山市内のホテル

［電子処方箋のイメージ］



これまでの「医療DX」の取り組みが評価され、当院は厚生労働省から電子処方箋の普及拡大に向けた波及効果が大きい医療機関として選定されています。

［日本における電子カルテの普及率］



厚生労働省「医療分野の情報化の推進について」より（一部抜粋）

遅れる日本の医療DX

日本の医療分野におけるデジタル化は、諸外国と比べて遅れをとっています。政府は「医療DX推進本部」（本部長・岸田文雄首相）を設置し、電子処方箋や電子カルテなどの運用を推進したい考えですが、特に中・小規模の病院やクリニックでは、導入にかかる費用面などがネックとなってなかなか進んでいません。

［諸外国の現状］

	アメリカ	スウェーデン	イギリス	シンガポール
一般病院	85～100%	90%<	99%<	100%
一般診療所	80%	90%<	99%<	90%<

厚生労働省「諸外国における医療情報の標準化動向調査」より　2019/03/29

周辺の医療機関、薬局、行政関係者ら約160人が参加。**厚生労働省大臣官房総務課企画官で、電子処方箋サービス推進室長の伊藤建氏**が「政府が進める医療DXの先行導入地区としての知見を全国に展開させたい」と病院を中心とした取り組みに期待を寄せました。

双方向で患者情報共有

現在、病院近隣の41薬局とは患者情報を共有する体制が整っており、薬剤師は病院の電子カルテを閲覧しながら質の高い服薬指導を行っています。医師側も実際に処方された薬の銘柄や、別の医療機関から出されている薬の情報を把握し、患者に優しい医療の提供につなげています。

電子処方箋のシステムは、医師、薬剤師がそれぞれ処方箋や調剤内容を登録すると、重複投薬などがある場合、自動でエラーメッセージが表示されるため、これまで以上に患者さんに優しい処方がかなうのです。

電子処方箋に対応する薬局は20カ所（7月末現在）ですが、参加の意思を示している薬局は多く、準備が整い次第、拡大していく方針です。横山副企業長は「より安全で正確な医療を地域全体で提供していくために欠かせないシステムであり、対応施設を速やかに増やしていきたい」と話しました。